す。岩壁先生は日本近代史をご専門にされておりまして、現在昭和天皇実録の編纂を行っておられます。本日の講演では、編纂事業と史料の保存・収集・公開等の問題についてご講演いただき、広島大学文書館の機能の一つである大学史資料の収集・保存・公開について貴重なご助言をいただけるものと思っております。

お二人のご講演と質疑応答を通じて、多くの方々に文書館の事業についてご理解いただき、来年四月に発足予定の文書館のいろんな支援材料として利用していただけたらと思っております。このシンポジウムにおける議論で、公文書の整理・保存・公開を通じて大学の情報公開機関としての位置づけを明確化し、それからさらに大学史研究を中心としつつ地域に貢献する機関として、国立大学法人広島大学文書館に対する理解を深めていただくことを期待します。広島大学文書館は多くの方々からの貴重なご意見を取り入れつつ、地域に根ざして成長していくものと考えております。

以上で開会のご挨拶とさせていただきます。本日は皆さんお忙しいなか、どうもありがとうございます。

［司会］ どうもありがとうございました。それでは引き続きまして、本日の第一講演「大学改革と文書館」に移ります。有川節夫先生よろしくお願いします。

大学改革と文書館

有川　節夫

はじめに

九州大学の有川でございます。本日はこのような記念すべきシンポジウムにお招きいただきまして、非常に光栄に存じます。同時に、身の引き締まる思いであります。

私がここに呼ばれましたのは、副学長であり大学史料室長を兼ねているからだと思います。私に与えられたタイトルは「大学改革と文書館」ですが、これは例えば私どものところの新谷恭明教授とか、皆さんよくご存知の寺崎昌男先生のご著書などを見ていますと、文書館と大学改革がしっかりと関連づけられておりますので、そういったことに関しまして少し違った観点から話をしろということだと理解しております。文書館は、私どもは「大学史料室」といっておりますが、これまで、新谷教授が室長をなさっていましたが、後ほどご紹介しますけれども、昨年四月に大学の規則改正があり、副学長あるいは総長特別補佐の一人が室長を努めるようになり、私にその役が割り当てられてしまったわけです。

大学史料室といいますと、文字が示しますように、史学との関係が深い組織であり、そういった範疇のものと考えられがちで、実際、これまで設立準備等で音頭をとってこられた方々もそういった関係の人が多かったのではないでしょうか。そして、非常に長い期間をかけて

設立に向けて努力をされているのですが、なかなか実現できない。そこで、少し視点を変えて、例えば副学長というような立場の人に室長をさせ、この問題を単に史学の問題や大学の単なるセクションでもなくて、大学の中核的な組織として位置づけるべきだと、九州大学では認識したのだと思っています。

今申し上げましたように、ベテランの前室長と、非常に有能な折田悦郎助教授という専任室員を擁し、すべてがうまくいっていると自負しております。そして最近では事務についても、事務局の格別な配慮により、再雇用制度を活用してまさにうってつけの人に来ていただき、非常にいい組織構成になりました。

このような私どもの大学史料室のこと等を含めまして、本日は、(1)図書館・博物館・文書館、(2)九州大学の大学史料室、(3)九州大学の文書館構想（私案）、(4)技術としての人文・社会科学の研究と教育、(5)大学改革と文書館、(6)法人化と文書館、(7)文書館のための情報処理技術、等について時間の許す限りお話をさせていただきます。

はじめに、「文書館」は、よく図書館や博物館と対比して議論されます。これに美術館が加わることもあります。大学文書館について議論するときには、やはりこうした類縁関係にある施設や理念との共通点や相違点、棲み分け等について考えることから始めるべきだと承知しています。しかし、今日の参加者の皆様は、そのへんのことについてはよくご存知でしょうから省略して、九州大学の大学史料室についての話から始めます。

私どもは大学史料室といわゆる文書館（ぶんしょかん、もんじょかん）を区別しつつあります。文書館については、数年前に概算要求へ向けた設置準備委員会を立ち上げ、そこでいろいろ議論していますが、それに関する一つの私案を紹介させていただきます。大学史料とそうでない史資料との棲み分けをどう考えるかというようなことについて一つお話をいたします。

それから、これは私自身の個人的な思い入れもあり、最近このような機会に必ず触れることにしていますが、「技術としての人文・社会科学」の研究・教育について少しお話をいたします。この「技術としての」という発想が実は、日本の人文・社会科学の振興と本日のテーマの文書館等を整備充実させていく上で、非常に重要ではないかと思っています。それから、ほんの僅かですけど、与えられたテーマ「大学改革」あるいは「法人化と文書館」についてお話をさせていただきます。また、私は、専門が情報学ですし、現在は情報社会ですので、情報社会における文書館に、情報学はどのような点で貢献できるのかというようなことなどを、五年以上にわたる図書館長としての経験等も踏まえながらお話をさせていただき、最後に一つのメッセージをお伝えしたいと思います。

一、九州大学の大学史料室

1　組織

さて、私どもの大学の史料室について説明させていただきたいと思

います。

委員会と大学史料室という組織とがあります。大学全体としましては、まず部局長会議というものがあり、その部局長会議のメンバーでもって構成している委員会が沢山あります。そうした委員会の委員長はすべて総長(学長)です。その中に情報公開委員会というのが、最近、情報公開法の制定以降のことですが、できまして、そのサブの委員会として、情報公開実施委員会というのがあり、情報公開、特に開示請求がありましたら、その実施委員会で審議検討して、親委員会の情報公開委員会に上げていくという仕組みになっています。情報公開委員会が所掌しているものに、私どもの史料室に関係の深い「史料収集・保存に関する委員会」というのがあります。私が委員長を務めています。情報公開実施委員会の方は、もう一人の副学長の柴田洋三郎教授が委員長をしておられます。そちらはこのようなご時世ですので相当忙しい状況にありますが、私どもの史料収集・保存に関する委員会は大体年に二回程度開かれていまして、専任の折田助教授の周到な準備のもとで、委員会の活動や予算要求等について審議しています。これから徐々に大きな問題が出てくるだろうと感じています。

それから大学史料室の方ですが、構成だけを簡単に説明しますと、まず、総長の下に室長がいて、副学長一人が務めるということになっています。それから副室長がいて、専任教官がいる。そして兼任教官を何人かにお願いして、事務員がいる。こんな構成になっています。専任教官は助教授一人ですが、新しい感覚で精力的に仕事し、大学史という史学の新しい領域の確立に寄与し、学内外で高い評価をいただいています。

委員会および大学史料室の目的ですが、これはお手元に用意させていただきました資料『大学史料室ニュース』第二〇号（二〇〇三年）の「創設十周年に当たって」という記事に書いています。この委員会の目的は、「調査審議」ということですが、史料の整理、保存及びその活用に関すること、九州大学に係わる史料の収集に関すること、それから九州大学に係わる史料としての公文書等の調査に関することとなっています。開催頻度は、先ほど申し上げましたように大体年二回です。それから大学史料室の方。これは業務ですが、史料の収集、整理及び保存に関すること、史料の調査・研究に関すること、史料の活用に関すること、というふうになっています。そして、構成員は専任の折田助教授の他、兼任で有馬學教授や今日お見えの新谷教授（副室長）、東定宣昌教授等、史料や文書の専門家にも入っていただいています。それから事務官にこの広島大学の出身で定年後の再雇用制度を活用しまして、庶務系で大学史料の分野に非常に明るい片山（昌彦）さんに来ていただいています。他に事務補佐員が二人。そういった体制でやっています。

2　沿革・活動

これまでの活動について特徴的なところを少し拾ってお話しいたします。昭和六〇（一九八五）年に「七十五年史編集室」が設置されています。こういった年史編纂の作業はどこの大学でもだいたい五〇周年とか七五周年とか八〇周年とか一〇〇周年とか、そういった折り目、

節目になされております。多くの国立大学ではそうした作業の後で、大学史料室とか文書館の創設の気運が高まっているように感じています。本学では、平成四（一九九二）年に史料室が設置されまして、その年の一二月に「九州大学大学史料室」というものが学内共同利用施設として設置されております。翌年から史料室ニュース等を刊行するようになりました。また、平成六年三月からは「九州大学大学文書館」という概算要求を行っています。ここでいう文書館というのは、史料にウェイトを置いたものです。以降この概算要求は毎年少なくとも大学事務局までは行っていますが、残念ながらまだ実現には至っていません。それから平成九年七月には、大学史料室所蔵の史料目録の刊行を開始しております。

このようないうならば大学史料室としては普通の活動の他に、平成一一（一九九九）年の四月から、非常に革命的なことだと私は思っているのですが、新谷教授を中心に大学史料室専任教官と兼任教官等による全学教育科目（総合科目）「大学とは何か―ともに考える―」という講義を開講し、以来毎年行っています。また平成九年一〇月からは、専任教官による「九州大学の歴史」（同じく全学教育科目）も開講しています。後ほど少し詳しく話しますが、この辺から、大学史料室と大学の基礎教育との関わりという新しい重要な理念がはっきり浮かび上がってきて、大学史料室としての新しい方向がでてきたように思います。大学史料室が、単に大学の年史の編集といったことだけでなく、大学における教育の最も基礎的な部分に関係するということがはっきりしてきました。つまり、自分の大学の歴史についての教育は、学生の勉学に対するモチベーションを向上させ、自分の大学の学生というアイデンティティを意識させることに役立つ、特に初年度に重要な教育分野であることが分かってきました。大学史料室のこのような取り組みは、総長裁量経費等の資金による九州大学の独自の研究助成制度「P&P」の助成を受け、さらに、それの中で特に優秀な成果を挙げたものに対して与えられる総長賞というのがありますが、その第一回目を受賞しています。

それからもう一つ、非常に大事な活動を行っています。つい最近、今年（二〇〇三年）九月のことですが、「九州大学『記憶の保存』プロジェクト」という新たな事業を始めました。九州大学の現在のキャンパスを画像・映像による記録保存しようというプロジェクトです。間接経費によるもので、金額的には一五〇万円程度の僅かなものですが、本学では再来年（二〇〇五年）秋から新キャンパスへの統合移転がスタートしますので、移転対象キャンパスに関しては非常に大事な、後世の「史料」が残されることになります。現在のキャンパスの建物とか風景とか、そういったものをしっかり保存しておこうというのです。これまでの大学史料室等の仕事は、誰かが過去に生産したものを整理し、保存し、利用するといったことが主なことでしたが、一つ踏み込んで、後世のためにしっかり記録を取っておくという活動は、評価していただけるのではないかと思っています。

今申し上げましたように、新しい方向としては、まず、大学史料室の基礎教育への積極的関与があります。二つの講義がなされています。次に、大学史料室長を副学長に指定する。これによって、大学史

料室を大学の中核的な重要な組織としてしっかり位置づける。つまり、大学史料室を歴史家中心の関心事から大学の全体の関心事へ転換させた。それから史料の構築・生成という新たな業務、歴史として残すことへの積極的な関与。このような活動は今後様々な組織で始められるのではないかと思います。大学史料室員としての資料の整理・保存・活用の経験に基づいた指導・助言をしてあげることによって、後世に非常にしっかりした史料が残せる。

3　広　報

私どもの大学史料室は学内的には結構関心を引いています。これから見ていただくいくつかの資料は「九大広報」からのものです。これは、プロジェクターの問題で、色がうまく出ていないところもありますが、実物はもうちょっときれいな肌色です。田島寮という古くからある学寮の恒例のイベントで、「樽みこし」というのがありますが、それを寮生たちがもろ肌出した勇ましいでたちで担いで市中に繰り出している様子を写したものです。表紙を飾っています。これは広報委員会の仕事ですが、とても国立大学の広報誌とは思えないくらいセンスのいいもので、同窓会はじめ各方面から好評をいただいています。この「九大広報」でも、大学史料室のことはよく扱われています。ごく最近では、「トピック」として折田先生の記事、「寄贈された大森治豊の関係の史料」というのがあります。これは、本学の起源である福岡医科大学の初代学長のご遺族が大学においでになり、多くの貴重な史資料をご寄贈いただきましたが、そのときの写真です。このように大学史料室関係の記事が「九大広報」では頻繁に掲載されています。

二、九州大学の文書館構想（私案）
－他の史資料をどうするか－

さて、ここで他の史資料について、本学の取り組みと私自身の考えを少し述べさせていただきます。九州大学では、既に学内措置で設置されている大学史料室と、設置準備委員会で現在検討中の「文書館（もんじょかん）」という構想があります。設置準備委員会は、つい先日第六回目が開かれました。回数は重ねていますが、まだ委員会としての最終結論には至っていません。

いま見ていただいている図は、私の個人的な私案です。九州大学の場合、史資料のための組織を考える上でいくつか条件があります。一つは本学には石炭産業に関する非常に豊富な資料を有しているということです。産労研（産業労働研究所）が解消され石炭研究資料センターとなっていますが、そこに膨大な資料があります。もう一つは、学内的に九州文化史研究所というのがあった時代があり、現在も機能していると思いますが、そこにかなりの図書・史資料があります。そういった状況が一方にあります。それから附属図書館に研究開発室というのが学内措置で作ってあり、専任の助教授が一人と多くの兼任の教官がいて活動しています。私は、図書館には、情報図書館学といいますか、ちょうど筑波大学と統合しました図書館情報大学で扱っていた図書館学と図書館に関する情報学というようなものが必要だと考えて

います。そういったことなどが背景としてあります。

なかなか難航して実現しませんので、取りあえず形を作ることが先決だと考え、附属図書館の中に分館が都合四館ありますが、その並びに文書館というものを置きまして、文書や史資料はそこに置き、先生方については、附属図書館研究部というのを構成して、先ほど言いました図書館プロパーの先生方と石炭研の先生方や九州文化史関係の先生方がそれぞれ部門を構成する。そして、一方で文書・史資料を専門家としてケアしながら、一方で図書館の貴重書等をケアする。このような研究部をもつことによって、図書館の戦力は削がれることになりますが、図書館の職員の専門性の向上という観点からしますと、この研究部の先生方の影響がじわじわと出てきて、そして図書館の方も相当専門性の高い専門司書つまりサブジェクトライブラリアンが次第に育成され、図書館にとってもメリットがあると考えています。

なお、大学史料室は、ここでいう文書館には含めず、現在計画中の新キャンパスでは、物理的にも大学の事務局に近いところに置くということにしています。ちょっと脱線して、新キャンパスについて少し説明しておきますと、福岡市の北西部に糸島半島がありまして、その中心部の、現在のキャンパスから約二〇キロのところに、九大は移転します。端から端まで約三キロあり、全体の広さは約二七五ヘクタールで相当広いキャンパスです。緑地をたくさん残しますので、実際に使う面積は一四一ヘクタール程度だと思います。その中心のセンター地区というところに事務局庁舎や博物館ができます。この事務局庁舎の中に、あるいはそれに接続する形で大学史料室を配置することになっています。ついでながら、新キャンパスの一等地を新入生が使うことになっています。学生を、特に新入生を大事にするという姿勢がここにも現れています。

三、技術としての人文・社会科学の研究と教育

それからもう一つ、九州大学の特徴的なこととしてご存知の方もいらっしゃると思いますが、大学院重点化に際して、学府・研究院制度というのを導入しています。これは当初は分かり難い煩瑣な教育・研究システムだと思われていましたが、実際にやってみますとなかなか便利なところがあります。先生方は研究院に所属します。学府というのは学生から見た大学院の組織です。ですから、研究院から学府と学部を教えに行くという恰好になっています。教育システムとして新しい学府を作る場合には、既存の研究院・研究所から、研究者としての所属を離れずに、それに正式に関係することができます。このようにして「システム生命科学府」というのがこの四月からスタートしています。これは、学府・研究院制度がなかったらできなかったと思います。

このような制度を使いますと、文書館や図書館、博物館等に不可欠なアーキビストや専門司書、学芸員といった専門職の大学院教育のシステムを、図書館研究部や博物館、大学史料室、情報基盤センター、人文科学研究院、比較社会文化研究院等の協力を得ながら構成することが可能になります。講座としては「専門司書講座」や「学芸員講座」、「アーキビスト講座」ということになるでしょうか。このような講座で、

例えば、史資料学専攻を構成し、それを既存の人文科学府あるいは比較社会文化学府に置けばいいと思います。このようにしますと、「技術としての人文・社会科学」の教育研究ができるのではないかと思います。新しい形の専門職大学院でもあります。これは全くの私案で、これから学内でもいろいろ議論しなければなりません。

広い意味では「大学改革と文書館」というテーマに入ることですが、現在既に立派な研究者が何人かはいらっしゃるのですが、その方々の後継者や専門家、専門的な技術者を組織的に養成することは、文書館にとっても大学改革という視点でも重要になると思います。私の印象では、失礼をお許しいただけるならば、本学の折田助教授のように、それぞれの大学に一人ぐらいは非常に立派な研究者がいらっしゃいますが、それは奇跡的なことだと感じています。そういった方の後継者を育成し、それから、いわゆるアーキビストやキュレーター、サブジェクトライブラリアンといった、研究者の仕事を補助し補完する高度な専門的な職員を養成するためのしっかりした教育制度を確立しておく必要があると思っているわけです。

こういったことに関して、ご存知の方も多いと思いますが、昨年（二〇〇二年）六月に科学技術・学術審議会学術分科会人文・社会科学特別委員会で約一年間にわたって集中的な討議を行い、人文・社会科学の振興方策について検討を行い、報告書をだしています。私もそのメンバーとして少し係ってきました。検討事項としては、人文・社会科学の特性と課題、現在の世界を見据えた人文・社会科学の構築、人文・社会科学そのものの振興方策、人文・社会科学と自然科学との間の共同作業等を扱ってきました。私は先ほど述べましたように、「技術としての人文・社会科学」という視点から、資料の電子化とか、図書館等の職員の専門性の向上等について発言をしてきました。この技術としての人文・社会科学という視点は、最終報告には収録されていませんが、しかし他のことに関しては報告書に取り込んでいただいていると思っています。文部科学省のホームページにもありますのでご覧いただければと思います。そこに図書館のことや例えば公文書館機能の一層の充実、それから図書館や公文書館等の機能の充実を計るため、高度な知識と研究開発能力を有するスペシャリストを養成することが重要である、というようなことが指摘されています。この報告に基づき、あまり大きな額ではありませんが、文部科学省から予算措置もされています。

四、大学改革と文書館

1　大学改革の目標

さて、「大学改革と文書館」について、先ほど紹介いたしました寺崎先生や新谷先生たちの著書に書いてありますし、私が話をするというのも、これまでの経験等からしておこがましいことですが、少し触れさせていただきます。大学改革を行うには、目標の設定が必要です。その際、自分の大学がどのようにしてできたのか、何をやってきたのか、というようなことに頓着せずに、どこへ行くべきか論じることは、恐らく不可能です。そうして考えますと、大学改革に限らず、大学に

ついて論じるときに、自分の所の史資料をしっかり整理・保存して活用できる体制を作っておくことが何より大事なことだと思います。

また、少し脱線しますが、こういったことに加えて、自分のところの学生が意欲的に、特に、図書館という公的な空間で学習・研究するということが私は大学改革の基本であり、近道だと考え、図書館長としてまじめに取り組んできました。もう一つ大事なこととして、先ほども触れましたが、本学で行っている自分の大学の歴史に関する低学年の基礎教育があります。そうした授業により学生たちはモチベーションを高め、アイデンティティを意識して勉強するようになったということであります。これまで、自分の大学の歴史を通じて学問の体系を学ぶというようなことが抜けていたのではないか、もう少し身近なところから全体を見るというようなことが必要なのではないかと思います。少し具体的にいいますと、自分の属する学部なり研究科（私どもは学府と言っていますが）等の歴史を知ること、あるいは自分の属する学科、専攻の歴史を知り、自分の属する講座の歴史を知る。そういったことをもう少しきちっとやるべきではないか。そうすることによって、また、それを逆の順番で辿ることによって、自分が関係している学問分野の体系を知ることに繋がって行きます。

2　図書館における学習の重要性

さて、図書館についての話を少し続けさせていただきます。今、図書館を、特に学部学生からみた図書館ということを考えますと、諸外国の大学図書館との間に決定的な違いがあると私は思っています。日本の場合には、大学図書館が学習図書館として機能していない。こう断言するといろいろ問題があるかも知れませんけれども、これまで文書館について少し勉強いたしましたが、私が大学図書館に関して感じていることとよく似たことが書いてあります。つまり、多くの先生方が外国に滞在したご経験をもっておられます。そこで、非常に充実した大学図書館を利用し、また学生たちがよく図書館で勉強している姿を見ていらっしゃると思います。これはアメリカやヨーロッパに限らず、東南アジアでも同じです。ところが、お帰りになったときには、そういったこと、つまり学生から見たときの図書館や学習図書館機能が充実しているというようなことは一切おっしゃらないのです。学生が図書館で勉強することにより、書籍からの知識の習得という本来の目的だけでなく、公的なスペースで勉強するわけですから、自然に「人を見る」、「人に見られる」といったことからくる健全な人間関係の醸成も期待できます。そして、オープンな空間で集中する習慣がそこで形成され、人格形成の上でも非常に重要だと思います。

こうした学習図書館機能の実現に関して、九州大学ではいろんな試みをしています。基本的な姿勢として、これは大学史料室や文書館についてもいえることですが、私は、教育・研究といういい方ではなく、必ず「学習・教育・研究」といういい方をします。教育・研究というのは、先生の側からの見方であり、学生からしますと学習・研究です。ですから、学生が主役ということを明確にするために、「学習・教育・研究」といっているわけです。この一言でもって、学生が大学の主役であることを端的に表現できます。また、これは未だ実現はしていな

いのですが、「入学金の一割を学生の図書経費に！」といろんなところでいっています。これが実現できますと、図書資料が、特に学生の視点から見た図書資料が格段に充実するはずです。脱線が続きましたが、いいたかったことは、「大学改革の基本は学生にしっかり勉強してもらうこと」にあるということです。そのためには、図書館で勉強するのが一番だといい続けてきたのですが、これからは「自分の大学史についてもしっかり勉強しなさい」と付け加えたいと思います。

3　自校史を知りモチベーションを高める

現在、自分の大学を認識する、あるいは知る機会としては、入学式における学長の告辞が一般的ではないでしょうか。そのような機会に、学長はほとんど例外なく自分の大学の歴史、特に開校時点や最近のことに関して言及されます。入学式に引き続いて行われるオリエンテーション等でも、若干のあいさつ程度の言及が自大学の歴史についてなされます。私は、先ほど紹介しました新谷教授や折田助教授たちの講義の成果からそう感じているのですが、入学時に体系的な大学史や大学論等と繋がる講義が何か必要ではないかと思っています。テキストとして、新谷教授たちの著書（新谷恭明・折田悦郎編『大学とはなにか－九州大学に学ぶ人々へ－』海鳥社、二〇〇二年）があります。ご覧いただければと思います。このような取り組みは、マスコミの関心も引いています。例えば、最近の、九月二八日付の読売新聞では、学生のやる気を引き出すために非常にいい試みだと評価して、紹介しています。

入学時や進学時のオリエンテーションは、学部学科単位でも行われています。そこで学部長あるいは学科長等が、一時間程度でもいいですから、学部史あるいは学科史について講演を行うといいと思います。そして、これは大学院の専攻における講義でないと無理かも知れませんが、その科目に関して自大学の研究者がどのように寄与してきたかについて言及することも重要だと思います。このような活動は文書館や大学史とは直接関係ないように思われるかも知れませんが、将来、そこに、そうした歴史に繋がって行くべき若者を迎えるにあたって意味のあることだと私は思っています。大学院における授業科目の中ではこうしたことを実行することは、それほど困難なことではありません。実際、私自身、ここ二〇年にわたって実行しています。

私が受け持っている大学院の講義に「機械学習特論」というのがあります。これはコンピュータに学習をさせてだんだん賢くしてゆくための手法や理論に関する講義です。帰納推論や類推といった各種の推論による学習や大量のデータを次々にコンピュータに与えて、そうしたデータを説明するような規則をコンピュータに見つけさせる手法などが対象です。最近、各方面で話題になっているデータマイニング等も対象になります。半年間の全部で一三回位の講義ですが、その七割位のところで、私も含めて、学生から見て自分たちの先輩たちがやった研究成果に言及することにしています。これは非常に効果があります。つまり、自分たちが直接知っている人の仕事、成果が次々に登場し、しかもそれは講義で使うわけですから、枝葉のことではなく、幹に近いところで展開された迫力のある内容ですので、非常にエンカレッジ

されるわけです。自分たちの知っている人たちができたのだから自分たちもできるはずだ、と思うようです。このように、古い史資料だけでなくて、すぐ近くにいる人たちのことにも触れることが重要だと思います。もちろん長い歴史をもつ分野では、遠い昔の自分たちの先輩であってもかまいません。そうしたことを通じて、学生のモチベーションが向上し、研究をする上での自信を深めることに繋がると思います。また、先輩たちの成果を講義に取り入れることによって、研究テーマを重要な意味のあるところに設定するようになり、教育だけでなく、研究面でも効果があると思います。

五、法人化と文書館

時間の配分が悪く、もう終わらなければならないのですが、大学の法人化と文書館について少しだけ触れておきます。寺﨑先生の著書にも書いてあることですが、長期目標や理念というものは、突然沸いてくるはずもなく、歴史があるとしますと、それを継承した延長上に設定されるべきであります。また、中期目標・中期計画といっても、それまでの歴史と全く関係ないところに設定・展開できるはずもありません。それまでの歴史を位置づけた新たな目標であり、計画であるべきです。

それから、自己点検・評価、あるいは最近では外部評価が求められていますが、文書館というのは、少なくとも内部でやる点検・評価の効率化という点では、非常に重要ですし、情報公開やアカウンタビリティ、情報発信といった面で不可欠な大学の組織・機構になってゆくだろうと思います。

寺﨑先生は、自分の大学の文書や物的資料を保存するのは当然の義務であるというようなことを述べておられます。私も全く同感です。このことに関係しますが、七五年史とか一〇〇年史、一二五年史といった年史編纂等の作業の効率化のためにも大学文書館機能は不可欠です。何より大学のアイデンティティを形成するという意味で非常に重要だと思います。

六、文書館のための情報処理技術

今日は、私の専門が情報科学ですので、文書館のためのＩＴ技術について少しはお話をしておこうと思い準備をしてはきたのですが、時間がもうなくなりましたので省略します。古い手書きの文書を蓄積し、検索するために北海道大学の田中譲教授のところで考案されているトランスメディアという技術や私のところで開発して市販されている非常に効率的なテキスト検索システム等が有効に機能すると考えています。ある種の画像処理技術も重要ですが、この程度に留めまして、また別の機会に譲ることにします。

おわりに

自分の大学の記録を保存することは大学の義務である、というこ

とは先にも述べましたように寺崎先生のお言葉ですが、これに加えまして、私は少し過激に、「大学史料室のない大学は大学とはいわない」というぐらいの気持ちがないといけないといっておきます。広島大学はもうお持ちになるわけですから大学だということになります。私どもは、数年前にできましたので大学です。このぐらいの意識を持ち、歴史へのこだわりを持って、後進に誇れる歴史を自分たちが築いていくのだという気概を持つ必要があると思います。そうしたことをやるためには、どうしても大学史料室や文書館というものがなくてはならないと思うのです。

新しい物事は若干の気力と資金があればいつでも可能だし、スタートできる。しかし一〇年、五〇年、一〇〇年という歴史のあるものを新しく作ることは不可能です。史料や歴史をもっと大事にしなければいけない。例えば、ヨーロッパ等に行きますと、古い壊れた建物を一所懸命修復している場面によく出会います。ドイツなど、戦災で破壊された建物を戦争の前の状況に修復する作業を根気よく続けてきました。そこでは、古さが、歴史が競われているのではないかと思います。彼らに比べますと、私たちは歴史に対するこだわりが少ないのではないかと思うのです。

自分の大学の歴史へのこだわりは、部局、学科、講座、そういった小さな単位での歴史へのこだわりに関係し、繋がって行きます。そのためにも、大学史料室や大学文書館が大事です。ご静聴、ありがとうございました。

（ありかわ　せつお・九州大学大学史料室長・副学長）

［司会］ どうもありがとうございました。質問等おありかもしれませんが、報告に対するご質問は、後の質疑応答の時間に回させていただきます。先生、どうもありがとうございました。

それではここで、約一〇分間の休憩を挟みたいと思います。第二講演は、こちらの前の正面の時計で二時一五分から行いたいと思いますので、それまでご休憩なさってください。

［司会］ 時間になりましたので、本日の第二講演を始めたいと思います。講演は「明治天皇紀編纂と史料公開・保存」です。岩壁義光先生、よろしくお願いします。

明治天皇紀編纂と史料公開・保存

岩壁　義光

はじめに

岩壁義光でございます。本日はお招きいただきましてありがとうございます。私は大学には非常勤では関係しておりますが、発表者の簡単なプロフィールの中にもありましたように、もともとは博物館におりまして、それから書陵部に移りましたものですから、大学の皆さまが問題とされている本日のテーマの主旨と、私の発表の内容が一致しますかどうか少し心配になっているというのが、今の偽らざる気持ちでございます。